

メッセージアウトライン

ヨハネ12：20~26「豊かな実を結ぶために」

「祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中にギリシャ人が幾人かいた」(20) 彼らはユダヤ教に改宗したギリシャ人だったと思われる。かれらはイエスの弟子のピリポの所に来て、イエスに会うことを願った。(21)「ピリポ」はギリシャ名であり、彼はギリシャ語が話せたのであろう。

ピリポはこれを聞くと、同じガリラヤのベツサイダ出身のアンデレに相談し、二人でこのことをイエスに話した。(22) このギリシャ人たちは以前からイエスのうわさを聞いており、もっと詳しい教えを聞こうとして直接イエスに会いに来たのだと思われる。これを聞いたイエスは、「人の子が栄光を受けるその時が来ました」と言われた。(23) 心かたくなユダヤ人たちは福音を受け入れず、逆に救いには遠く、罪の暗黒の中にあると思われていた異邦人が熱心にイエスを求める。その象徴的な出来事に、イエスはご自分の死の時が来たことを知られた。イエスの十字架こそ全世界のあらゆる人々に救いの門を開くものである。

「人の子」とは旧約のダニエル7:13~14と関係がある。ユダヤ人たちが「人の子」と聞くと連想するのは、天の雲に乗って来て、永遠の神の国の主権を確立されるお方であった。それで彼らは神の栄光というのはそのように現されると考えていた。しかし、これは世の終わりの時に関する預言であることをユダヤ人たちは知らなかった。イエスがどのように栄光を受けるかということが次の24節で言われている。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみです。しかし、もし死ねば、豊かに実を結びます」。(24) ここでイエスはご自分の死のことを言われているのである。イエスが十字架につけられて死ぬのは神の救いの計画の失敗でも挫折でもなく、完成であり、栄光を受ける時なのである。イエスは私たち人間の罪の贖いのために、身代わりとして十字架にかかってくださるのである。

「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです」。(25) ここでは、永遠のいのちに至るためにはどのように生きるべきかということが教えられている。→マタイ19:16~22,6:24参照。

もし私たちのいのちがこの世の何ものかに神以上に結びつき、私たちの生活や私たち自身を神以上に大切にし、そこにとどまっているならば、やがて私たちがこの世を去らなければならない時に、すべてのものを失い、自分の最も大切ないのちをも失ってしまうだろう。しかし、自分のいのちを憎む、つまりイエス・キリストにあって自分自身よりも神を第一とし、神の国とその義とをまず第一に求める生き方(マタイ6:33)をしていくならば、私たちは永遠のいのちに至るのである。

イエスはご自分を信じ仕える者は「わたしについて来なさい」と言われる。(26) 弟子としてイエスに仕える者は常にイエスのいる所にいるべきであり、またその歩む道に従うべきである。そこには神からの豊かな報いがともなう。しかし、またそれは自分のいのちを憎む道であり、自分の十字架を負ってイエスに従う道である。私たちがイエスを信じ仕える者として、自分の十字架を負って従い続け、地に落ちた一粒の麦となって豊かな実を結ぶ者とならせていただこう。

→ルカ9:23~24